

『ダドリック先生がどういう思いでTPNを開発したのか、真剣に考えて欲しい！』

世界中が大変なことになっています。USA のトランプ大統領のせいです。世界の King だと自認しているという話もありますし、やり放題、好き勝手。これが認められるのですか？世界中の秩序もなくなっていました。ビジネスマンが大統領になって、関税を好き放題に決める。もう一人のビジネスマンのマスク氏も好き放題。まあ、この方達をアメリカ合衆国民が選んだのですからね。何とも言えません。言ってもどうにもなりません。まだ大統領になって 1 か月しか経過していないのに、世界中が搔き回されています。ウクライナ問題では、ウクライナが戦争を始めた、なんてことを言う。ロシアが勝手に侵攻したことは間違いないのに。困ったことです。ウクライナがかわいそう、ゼレンスキーダン統領がかわいそう。プーチンとトランプが世界を動かす？それは駄目ですよ。

2 月は、本当にあっという間に逃げました。特に、日本海側の人たちは雪、雪で、身動きがとれなくなっています。テレビで雪の様子を見ながら、太平洋側で生活している私は、申し訳ないような気持ちになっています。大阪でも少し雪は降りました。気温も低い。しかし、何 m もの高さに積もった雪の映像を見ながら、当然ですが、私は生きていけないだろうと思っています。それにしても、テレビで見るだけですが、降っている「雪の粒」の大きいこと。まるで白いレースのカーテンのように見えます。早く春になれ、と願っています。

横浜での JSPEN に参加した、これが 2 月の一番のイベントでした。教育講演をさせていただきました。25 分間、私なりの考えを述べさせていただきました。私は JSPEN の非会員なので、比企会長の温情によって講演させていただいた、となるのでしよう。座長は大村先生。講演が終わってからの座長の発言が長くて、私、どこを見ていたらいいの、という感じになって、「キヨロキヨロしていましたね」と野呂くんに言われました。高知の岩佐先生夫妻が聞きに来てくださいました。うれしかった。小越先生の弟子として、共感してくださったとのこと。ありがとうございました。教育講演の後、いろんな方に声をかけていただきました。ありがとうございました。会場の外で、いろんな方と写真を撮ったのですが、誰も送ってくれていません。送ってください。

それはさておき、としましょうか。とにかく横浜を満喫しました。木曜日の夜に桜木町駅に到着。駅を出た瞬間、横浜は大都会だ！と実感しました。1 月に港神戸の観光をしたのですが、スケールが違います。もちろん、神戸には神戸らしい良さがあります。学会期間中の 2 日間とも、横浜観光をしました。1 日目は、朝の教育講演の前に海岸沿いを歩いて学会場へ。講演前に 1 万歩以上歩いていました。昼飯は牛鍋の荒井屋へ。11 時半に行ったのに行列。45 分ほど待ってやっと食べることができました。学会場への帰りにはロープウェイで桜木町へ行き、次にランドマークタワーの展望台：スカイガーデンに上りました。夕方、もう一度ロープウェイに乗って夜景を味わい、歩いて横浜中華街へ。翌朝も歩いて赤レンガ倉庫へ行き、その後は海岸沿いに学会場へ行きました。ポスター会場と展示会場でうろうろ。11 時頃から鹿児



↑寒い 2 月でした。車通勤なんですが、最低気温は -2°C でした。この写真は、2 月 8 日の朝、大学へ着く直前の道路です。うっすらと雪がありました。滑りそう？車は冬用タイヤにしていますので問題ありません。



↑2025 年 2 月 8 日の大学キャンパスです。雪景色と言ってもいいですね。右は私の部屋から撮った写真です。金蘭千里中学・高校の生徒さん達が歩いて通学しています。



↑左は 2 月 8 日 7 時 45 分に撮影した、私の部屋からの写真。右は、2 月 18 日 8 時 5 分に撮った写真。2 回、雪が降ったことになります。まあ、積もったとは言わないほうがいいですね。



↑左：2 月 13 日の夜、横浜市桜木町駅を出て、横浜は大都会だ！と実感したので写真を撮りました。駅前の歩道橋から撮りました。ランドマークタワー、観覧車、インターコンチネンタルホテル、大都会です。久しぶりの横浜だったので、ちょっと圧倒された、という感じになりました。右は、牛鍋を食べて、会場に戻る時に気づいたランドマークタワー辺りの景色。いい天気でした。

島鹿屋の池田病院の管理栄養士さん2人と観覧車に乗り、その後、赤レンガ倉庫の近くから横浜港クルーズへ。90分間、横浜を海からも見ることができました。

学会場は、自分の教育講演が終わった後は展示会場とポスター会場をうろうろしただけでした。いろんな方にお会いし、いろいろ話をできたのはよかったです。展示会場をうろうろして感じたのは、JSPENは静脈経腸栄養学会という名称を捨ててから、それまでも傾向はあったのですが、食事・経口栄養学会に変わったんだ、ということ。展示会場の雰囲気が日本病態栄養学会と同じようになってしまった、という感じ。静脈栄養の器材も販売している企業が、経腸栄養関連の器材しか展示していなかったので、その理由を聞くと、この学会では静脈栄養の器材を展示しても誰も興味を示さないから、でした。仕方ないことですけど。

もう一つ、大事なお知らせをしなければなりません。血管内留置カテーテル管理研究会（JAN・VIC: Japanese Association for Nutrition & Venous Access & Infusion & Care）としての活動を終えました。リーダーズの中で「JAN・VICセッション」として議論は継続しますが。最大の理由は、研究会の活動に興味がある方が少なかったことだと私は解析しています。演題が集まらない、参加者が増えない、企業のサポートが少ない、これでは研究会を維持できません。企業のサポートとしては、静脈栄養関連企業が学術活動をサポートしてくれなくなっていることが一つ。静脈カテーテルを販売している企業は、カテーテルの挿入・留置技術に力が入っていて、留置期間中の管理には興味がないというか、そういう雰囲気であるため、JAN・VICのような、留置期間中の感染管理、栄養管理に重きを置いている研究会をサポートしてくれないのだろう、そんなことを考えています。これも仕方ないことです。**大事なのはカテーテル留置期間中の感染対策**です。しかし、感染対策の専門家の方々は、カテーテル関連血流感染症の予防にはあまり力を入れてくれない、そんな気がしているのですが…。特に、コロナ以来、その傾向が強くなっていると、私は感じています。



↑久しぶりに新幹線に乗るので、大奮発して、新大阪駅で「中之島ビーフサンド」を買って食べました。これだけで1450円でした。うまかった？もったいないような気がしたのです。右は、崎陽軒のシウマイ弁当。横浜へ行った、という気になりました。シウマイもうまかったのですが、私、左の白ご飯が好きなんです。



↑教育講演です。ニュートリーの三上さんが撮ってくださった写真です。右下に写っているのは岩佐先生のように見えます。1枚目のスライドは、第30回日本静脈経腸栄養学会の写真。ダドリック先生との写真、ポスター、記念ゴーフルです。もともとはこの学会で活動していた、ということで、静脈経腸栄養ガイドライン第3版の表紙も出しました。もう、10年前のことです。



↑展示会場です。ほとんどが食品です。フード、とろみ、井？まさしく経口栄養学会ですよね。



↑森永乳業クリニックとニプロは、第17回リーダーズのランチョンセミナーで共催していただけるので、写真を大きくさせていただきました。依怙贅肉？もちろんです。ニュートリーの写真も、他の企業の写真より少し大きめでしょう？やはり、リーダーズを応援してくださっている企業には、お礼をしなければなりませんので。ありがとうございます。

ゼン先生：この2月は大雪で大変でした。といつても、大雪は日本海側ですけど。

小越先生：大阪や兵庫では雪は降らなかつたんだろう？

ゼン先生：ちょっと降りましたが、もちろん、積もるほどではありませんでした。

小越先生：今年は本当にすごい雪だったらしいな。

ゼン先生：会津の雪もすごかつたと木暮くんが言つていました。青森の酸ヶ湯では5mを超えたそうです。

小越先生：すごいなあ。

ゼン先生：テレビの報道では、雪国の方達は、もううんざりだ、と言つていました。

小越先生：そりやそうだろう。雪のために身動きできなくなっているんだから。

ゼン先生：なんか、雪国の人たちに対して申し訳ないような気持ちになつたりしました。

小越先生：何もできないけどな。気温も低かったな。

ゼン先生：はい。大阪でも車の温度計が-2°Cの時がありましたから。

小越先生：-2°Cか、氷点下か。寒いなあ。歳をとると寒さが堪えるだろう？

ゼン先生：そうでもないです。

小越先生：本当か？ズボンの下に密かにぱっちを穿いているんじゃないのか？

ゼン先生：先生もぱっちって言うんですか？

小越先生：え？ダメなのか？

ゼン先生：今はスパッツ、レギンス、と呼ぶらしいですよ。

小越先生：どう違うんだ？説明してくれよ。

ゼン先生：詳しくは聞かないでください。ちょっと言つただけですから。

小越先生：君がこういう新しい下着なんか、知つてはいるはずはないな。君もぱっちって言つてゐるんだろう？

ゼン先生：そうです。でも、私、穿いていません。

小越先生：そうか、やせがまんだな。

ゼン先生：やせがまんではありません。

小越先生：まあいいだろう。ところで、横浜でのJSPENを行つたんだったな。

ゼン先生：はい。行きました。横浜って、大都会ですね。いい観光をさせてもらいました。

小越先生：おいおい、学会の中身より観光の話が優先か？

ゼン先生：ふつう、学会に行ったんだから学会の中身を先に言いますよね。

小越先生：そりやそうだろう。

ゼン先生：でも、なんか、私がかつて関係していた学会とは違うようになっていて、どうでもいいか、そんな気持ちになって、観光を優先させてしまいました。先生だって、学会の実態を知つたら寂しくなりますよ、きっと。



↑牛なべ、荒井屋です。完食！というか、ご飯のお替りをしてしまった、古希のじいさんです。牛鍋が出来上がる前に一杯食べてしまいました。そして、牛鍋と共にもう1杯。牛鍋もうまかった！45分、待つた甲斐がありましたよ。また、行くぞ！



↑横浜のロープウェイです。素敵な形をしています。8人乗りですが、この日はバレンタインデーなので、カップルばかり、という雰囲気。8人乗りなのに2人ずつ。車いすのまま乗ることができます。1回目は男性3人で乗りました。2回目、夜景を見る時も男二人で乗りました。わずか5分ですが、1000円也。



↑ロープウェイは「YOKOHAMA AIR CABIN」という名称です。乗らないとこの景色は見ることができません。



↑夕方、18時に乗った、ロープウェイからの写真です。窓に反射してなかなか写真が撮れません。まあ、こういう雰囲気でした、という写真です。



↑ロープウェイを外から撮ると、こういう雰囲気です。おしゃれですね。しかし、このゴンドラ、何台あるのでしょうか。

小越先生：そうか？

ゼン先生：とにかく、静脈栄養、経腸栄養を中心とした内容ではなくなっていますから。

小越先生：やっぱり経口栄養学会になつてしまつたのか。

ゼン先生：そうですね。展示会場を見たら、その傾向は明らかです。病態栄養学会とほぼ同じ展示内容でした。食べ物、飲み物ばかりです。弁なんかもありました。

小越先生：そうか。しかし、世の中全体が「栄養=食」となつているんだから、仕方ない部分もあるんだろう。

ゼン先生：調理師さんも会員になっていますから。

小越先生：へええ調理師か。

ゼン先生：ちょっと驚きましたけど、まあ、これが学会の方針ですから、何とも言えません。とにかく会員数を増やすための手段なんでしょう。

小越先生：経口栄養学会だったら、調理師さんは必要だぞ。そういう理解すればいいと思う。

ゼン先生：やっぱり先生は寛容というか、太っ腹ですね。私はなかなかそういう考えにはなれません。

小越先生：仕方ない、仕方ない、だよ。若い人達のやることを認める、それも大事だ。時代の流れを読むことだ。

ゼン先生：申し訳ないのですが、私には無理なんです。だから、今回を最後の JSPEN 参加にするつもりです。

小越先生：そんなに内容が変わっているのに、まだ、名称は JSPEN なのか？

ゼン先生：JSPEN です。日本語は「日本栄養治療学会」で、英語は「Japanese Society for Parenteral and Enteral Nutrition Therapy」です。

小越先生：おかしいじゃないか。日本語は栄養治療学会だろう？それに、経口栄養中心の学会になって、日本語名も変わっているのに、未だに Parenteral and Enteral Nutrition が学会の英語名に入っているのは。

ゼン先生：そうなんですが、いろいろ、経緯があるんでしょう。

小越先生：オレとしては、英語名も変えて欲しいと思う。

ゼン先生：私も思います。そのうち、Japanese Society for Medical Nutrition Therapy とするんじゃないですか。なんか、ESPEN も Medical Nutrition Therapy、MNT という呼び方になっているらしいですよ。

小越先生：そうなのか。でも、そっちのほうがいいぞ、日本語名の栄養治療学会に対しては。

ゼン先生：略語は JSMNT ですかねえ。

小越先生：呼びにくい略語だ。

ゼン先生：ジャスマント、なんて、どうですか。

小越先生：いいんじゃないか。ジャスマントか。

ゼン先生：ジャスマンティーとも読みませんか？

小越先生：それは駄目だろう？冗談が過ぎる。

ゼン先生：すみません。

小越先生：わかればよろしい。しかし、英語名はそうしてもらうほうがオレはうれしい。

ゼン先生：この英語からすると、会員は Medical Nutritionist と呼びたいんじゃないでしょうか？

小越先生：なるほど、Medical Nutritionist か。でも、それは君が発想した Medical Nutritionist とは内容として違うだろう。君だってそう思っているんだろう？

ゼン先生：ちょっと言ってみただけです。Medical Nutritionist は、静脈栄養と経腸栄養を駆使した栄養管理が実施できる医療者と



↑ ランドマークタワーのスカイガーデンからの景色です。本当にいい天気でしたので、景色も抜群でした。横浜球場も見えました。富士山は見えませんでしたね。右上の井伊直弼の銅像も見えるのですが、これを知っている人はほとんどいないでしょうし、興味もないでしょう。港がきれい！ちょうど、映画ドラえもん記念の展示が行われていました。左下は JSPEN の会場、パシフィコ横浜ノースです。今頃、参加した方は一生懸命勉強しているんだろうな、と思いつながら、私はのんびり観光していました。



↑ 展示会場とポスター会場です。たくさんの方が参加していることがわかります。1万人が参加？私はうろうろしていただけだからわかりませんが、昨年よりは少なかった、という噂をきましたけど。それでも、こんなにたくさんの方が参加しているって、うらやましい。このうちの1割でもリーダーズに参加してくれたら、うれしい？困る？1000人も来たら、会場に入らないし、徹底的な議論ができません。でも、もう少したくさんの方に参加して欲しい。



↑ リーダーズ仲間で会食。横浜中華街で中華料理。真ん中の緑色の料理は、このお店の売り、翡翠チャーハンです。翡翠色=緑色、なんです。この写真、お店の若いウェイタレスさんに私のデジカメで撮ってもらったのですが、なかなかうまく撮れません。若い方達は、写真是スマホで撮るので、デジカメの使い方を知らないようです。知らないほうがふつう、なんでしょうね。かつて、私の仲間達は若芽組と呼ばれたことがあります、今だったら「リーダーズ組」と呼ばれるのでしょうか。

いう意味なので、明らかに違います。まあ、名称として、Medical Nutrition Therapy とすれば、Medical Nutritionist という名称はありかな、と思っただけです。とにかく、Medical Nutritionist はリーダーズで商標登録しています。

小越先生：そうだよな。もうやめよう、この話は。残念な気持ちになるから。ところで、教育講演だったな、君が担当したのは。どういう話をしたんだ？

ゼン先生：先生に報告しないといけませんか？

小越先生：もちろんだよ。何年かぶりに君が JSPEN で講演した、どんな内容だったか、オレに報告する義務がある、当然だ。オレの弟子として、だよ。

ゼン先生：そうそう、先生のお弟子さんの岩佐先生がご夫婦で来ておられました。私の講演があるので来たのだ、と言ってくださいました。

小越先生：ほほう、うれしいことだな。

ゼン先生：本当にうれしかったんです。

小越先生：それはよかったです。で、どんな内容で講演したんだ？ タイトルはどうしたんだ？

ゼン先生：「Medical Nutritionist への誘い」です。

小越先生：なるほど。静脈栄養も経腸栄養もちゃんと実施できる専門家になりますよう、だな。

ゼン先生：そうですね。別に、JSPEN を皮肉ったのではありませんよ、ずっと主張してきたことですから。

小越先生：それは、もともとの JSPEN 設立時の目的だからな。それで、どんなストーリーにしたんだ？

ゼン先生：最初に、第30回 JSPEN 学術集会の会長をさせてもらって10年です。いろいろあって退会したので、こんな所で講演させてもらう立場ではありません。比企会長に確認したら、是非、と言ってもらったので、恥ずかしながら、という気持ちで来ました、から始めました。

小越先生：なかなかおもしろい発言だ。それから？

ゼン先生：ダドリック先生が、なぜ、TPN の開発の研究を始めたのか、そのきっかけとなるエピソードを話しました。ダドリック先生がどういう思いだったのか、です。食べられない患者を救いたい、その強い思いを説明して、この重大な出来事を、TPN 開発の本来の意義を、成果を、振り返って考える必要がある、です。

小越先生：その通りだ。現在の TPN に対する考え方は、間違っている。そういうダドリックの思いも知らず、TPN は感染しやすい、肝機能異常が起こりやすい、効果もない、そんなことになってしまっている。

ゼン先生：本当にそうですよね。ある意味、TPN は仕方なくやるものだ、みたいな雰囲気にもなっています。

小越先生：仕方なくじゃないだろう、有効性は確認されているんだから。

ゼン先生：それと、ダドリック先生の論文を読むと、「静脈栄養」



↑ ヨコハマグランドインターコンチネンタルホテルです。海に浮かぶヨットの白い帆をイメージした外観ですが、ホテルの最上部には女神像が設置されています。知らなかった。知らなかつたでしょう？



↑ 横浜の観覧車、コスモクロック 21 にも乗りました。1989年横浜博覧会の時に作られたのだそうです。世界最大の時計型大観覧車で、高さ 112.5m です。さすがに最高点に達すると、高所恐怖症の私は怖い！でも、景色は抜群でした。



↑ 横浜クルーズツアー、ランチクルーズに乗船しました。予約していなかったのですが、タイミング良く、11時出航、90分間クルーズに乗りました。出港直前にここにたどりついたのです。ベイブリッジの下をくぐりました。山下公園の氷川丸の近くへも行きました。横浜港を海から見ることができました。池田病院の二人の管理栄養士さん、横浜を満喫していました。一緒にクルーズ船に乗れて、私も楽しむことができました。いろいろ話もしました。論文を書きなさいよ、と言いましたが、無駄かな？夜のクルーズもいいだろう、と思いましたが、そこまでの観光はできないし、やらないほうがいいだろう、ですね。学会に来たのですから。でも、かつて、外科代謝栄養学会の懇親会で夜のクルーズに乗ったことがあります。

対「経腸栄養」、どっちがいいか、という議論があるが、そういうなくて、その患者にとってより有効な、あるいは実施できる方法を選べばいいんだ、と言っておられます。

小越先生：その通りだ。どちらもちゃんと実施できるようになる必要があるんだ。

ゼン先生：TPNは駄目、その間違った考え方になっている理由は、きちんとした臨床栄養教育が行われていないこと、そして、栄養療法の威力を実感していないからだ、として、TPNでむちやくちや栄養状態が良くなっている患者さんを紹介しました。

小越先生：それは有効なプレゼントだよ。目で見て栄養状態がよくなっていることがわかる患者だろう？

ゼン先生：そうです。

小越先生：とにかく、今は、TPNがどれほどの威力があるのか、わかっていない医師ばかりだろう。現在は、TPNは感染必発、肝機能異常必発、だからできるだけTPNはやらないほうがいい、そんな感じになっているんだからな。

ゼン先生：その考え方をひっくり返したいんですけど。

小越先生：確かに、そうしたいな。

ゼン先生：次に、昨年の年末に、私の臨床栄養仲間に協力してもらった、アンケート調査結果の一部を披露しました。まだ論文にはしていませんが。

小越先生：前回の、薬剤師問題と一緒に実施したアンケート結果だな。

ゼン先生：そうです。全国の534人からの協力を得ました。

小越先生：前にも言ったけど、いい仲間がいるな、君には。

ゼン先生：本当にありがたいことだと感謝しています。

小越先生：それで、その調査結果は？

ゼン先生：今回の講演で使ったのは、4つだけなんです。まずは、「ほとんど食事が摂取できていない症例に糖電解質輸液だけで管理している症例がいるので困る、という噂を聞きますが、貴院ではどうですか？」です。

小越先生：いい質問だな。是非、知りたい結果だよ。

ゼン先生：「そういう症例は結構多い」が37.8%、「時々いる」が52.9%でした。

小越先生：まあ、予想通りか。2つを足すと90%以上になるな。

残りの約1割は、そういう症例はいない、ということだな。

ゼン先生：そうですね。いないはずはないと思うんですが。

小越先生：ハハハ。そういう病院もあるってことだ、ちゃんと栄養管理をしているってことだよ。

ゼン先生：次は、「静脈栄養の適応だと思うのだが、静脈栄養が実施されていないと思う症例は多いですか？」

小越先生：それもいい質問だ。

ゼン先生：「非常に多い」が5.7%、「多い」が51.3%、「あまりいない」が37.6%、「ほとんどない」が5.4%でした。

小越先生：「あまりいない」「ほとんどない」は、合わせると43%だけど、そんなにいるのか。

ゼン先生：予想より多かったんです。「非常に多い」と「多い」がもっと多いと予想していたんですけど。ちゃんと静脈栄養を実施している、ですね。でも、私は、適応についての判断が甘



↑ ロープウェイとランドマークタワーのSKY GARDENの入場券です。ロープウェイは昼間（13:00）と夕方（18:03）の2枚です。スカイガーデンは満65歳以上の割引券です。観覧車は、なぜかわかりませんが、入場券は没収されたんです。なぜ？わかりません。記念に欲しかったのに。



↑ 「まさかJSPENの会員で、この方を知らない人はいませんよね。それはもうぐりです。」と言ったのですが、知らない会員が多いのではないかでしょうか。ダドリック先生の話をする人がいないのではないかでしょうか。ダドリック先生がTPNを開発した、その意義をわかっていない人が多いと思います。だから、TPNをないがしろにするのでしょうか。JSPENの専門療法士の試験に「TPNを開発したのは誰か？英語で書け。」という問題を出すべきだと思いますが、どうでしょうか。ダドリック先生を知らないても、経口栄養ができたら栄養管理はできると思っている人が大部分でしょう。

い、適切ではない、だから、こういう回答になっているんだと思いますけど。

小越先生：確かに、そうだろう。

ゼン先生：次が問題なんです。「医師の臨床栄養に対する関心はどうですか？」

小越先生：非常に興味ある質問だ。でも、答えにくいだろう。自分の病院の医師の評価だろう？

ゼン先生：そうです。答えにくいと思います。「関心は低い」とは言いにくいと思います。でも、結果は、「関心は低い」が51.1%でした。

小越先生：なるほど、まあ、妥当な結果かな。

ゼン先生：次がもっと問題だと思う質問です。

小越先生：なんだ？

ゼン先生：「医師の臨床栄養に対する知識レベルは？」です。「高い」「低い」「ふつう」で答えていただきました。

小越先生：ふつう？ 難しい表現だな。

ゼン先生：はい、そう思います。何がふつうなんだ？ 基準は？ となりますよね。

小越先生：そうだよ。何と比較したことだ？ となる。

ゼン先生：でも、まあ、主観で、印象で、という感じで答える人もいました。先生、どういう結果だったと思いますか？

小越先生：「医師の臨床栄養に対する知識レベルは低い」とは言いにくいだろう。だから「ふつう」が大部分なんじゃないか？

ゼン先生：そう思われますよね。

小越先生：そうだよ。しかも、回答者の職種によって違うんじゃないか？ どんな職種の人が答えてているんだ？

ゼン先生：細かくは解析していませんけど、ほぼ全職種、と考えてください。割合はまだ解析していません。全体として、です。

小越先生：医師以外の、看護師、管理栄養士、薬剤師、などの職種の人でも、「医師の知識レベルは低い」とは言いにくいぞ。

ゼン先生：そうですね。医師自身も言いにくいでしょうね。

小越先生：その通りだが。

ゼン先生：「ふつう」が28.3%、「低い」が、なんと、66.7%、3分の2だったんです。

小越先生：へええ。「低い」が3分の2か。なんと！ だな。

ゼン先生：そうなんです。答えにくい質問に対する答えが、「低い」が3分の2だったんです。

小越先生：驚きだけど、君の臨床栄養仲間のレベルが高いから、そういう評価になったんだろう。

ゼン先生：確かに。そうですね。そうかもしれません。回答してくれた私の仲間のレベルが高いから、医師の知識レベルが低い、自分達より低い、なんですね。それも影響していますね。

小越先生：そうだよ。

ゼン先生：でも「低い」が3分の2もあるということは、知識レベルが低い医師が多い、これは間違いないと受け止める必要があるんじゃないでしょうか。

小越先生：そうだな。回答してくれた君の仲間のレベルが高いということを考慮しても、そう受け止めるべきだろう。

ゼン先生：やっぱり教育ですね。臨床栄養学をちゃんと教えてくれる大学がほとんどないようですから。

小越先生：その通りだな。そういえば、1年前に、医学教育のカリキュラムの中に「栄養アセスメント、栄養ケア・マネジメント、栄養サポートチーム、疾患別の栄養療法について理解して

日本における臨床栄養学と栄養管理の流れ

国民の健康と栄養 経口栄養



食べられない患者の栄養管理 EN・PN



1966年 小野寺博夫 白髪健蔵 前谷俊三 小越章平 岡田正

日本栄養治療学会へのはなむけ

dates back almost 400 years. The adage that we "make progress by standing on the shoulders of our predecessors" is obvious from the number of important contributions that was essential to the eventual development of PN and that is outlined briefly in Table I.

**Make progress
by standing on the shoulders of our predecessors**

先人の肩の上に立たせてもらってさらに前へ進もう

日本の臨床栄養のPredecessors



私が知っている、この領域で活躍された諸先輩達です。先輩達にかわいがっていただき、この領域で仕事をすることができました。ありがとうございます

私にとっての臨床栄養のSpecial Predecessors



Dudrick
先生



小越先生



岡田先生

▶ 偉大な先輩の肩の上に立たせてもらいましょう

▶ 先輩の肩の上に立たせてもらえるように努力しましょう

▶ そして、後進に乗ってもらえる肩になるような仕事をしましょう

いる」が組み込まれたから、これから卒業してくる医師は臨床栄養をよくわかっている、だから、管理栄養士さんもがんばりなさいよ、ということだったんじゃないかな？

ゼン先生：そうです。病態栄養学会での講演で、そういう話を聞きました。

小越先生：何年か先の卒業生は、そうなってくれるかも、な。その点について、講演後に質問はなかったのか？

ゼン先生：ありました。医師のレベルアップを図ることについて、どう考えていますか？と質問されました。

小越先生：なるほど。いい質問だ。どう答えたんだ？

ゼン先生：アイデアはありません、と答えました。

小越先生：それは答えになつてないぞ。

ゼン先生：でも、本当にそうなんですよ。先生、なんか、アイデアはありますか？

小越先生：そう言われたらそうだけど。

ゼン先生：次の教育講演の座長の阪大消化器外科の土岐教授が見えたので、大学での臨床栄養教育が必要だという意味で、土岐教授に聞いてください、と言つてしましました。

小越先生：ハハハ、実は、それが正解かもしれないな。大学の医学部の教授達に、臨床栄養の重要性を理解してもらって、教育カリキュラムに入れてもらうことが大事だな。

ゼン先生：先生もそう思われるでしょう？質問に対する答えとして、逃げた、と言われるかもしれませんのが、実は、これこそが本当の正解なんじゃないかと思うんですよね。

小越先生：それには賛成だが、君は何もしないのか？

ゼン先生：そう言われると困るんですが、やはり、地道に臨床栄養に興味がある人を育てる、ですかねえ。

小越先生：リーダーズの活動をがんばる、ということだな。

ゼン先生：そうですね。申し訳ないんですが、それ以上の活動は、もう、この歳なので、できません、と言うしかありません。若い方達にがんばって欲しい、これも付け加えます。

小越先生：君の教育講演の結論はどうしたんだ？



↑第17回 静脈経腸栄養管理指導者協議会学術集会は、3月8日と9日、横浜の「はまぎんホール」で開催されます。是非、参加してください。

ゼン先生：歴史を振り返って、ダドリック先生の論文からこの学会への餓として「**Make Progress by standing on the shoulders of our predecessors**」を出しました。ダドリック先生は、TPNの臨床応用に成功したのは、ぱつと思いついたんじゃない、先人の成果を学ばせてもらって、その結果として成功できたんだ、だから、あなたたちも、先人の肩の上に立たせてもらって、さらに前へ進もう、と言っている、です。

小越先生：いい話じゃないか。

ゼン先生：そして、私が知っている諸先輩の写真を出しました。最後に、私にとっての特別な **Predecessors** は、ダドリック先生、小越章平先生、岡田正先生、だと言わせていただきました。

小越先生：なるほど、なるほど、だ。

ゼン先生：偉大な先輩の肩の上に立たせてもらいましょう。先輩の肩の上に立たせてもらえるように努力しましょう。そして、後進に乗ってもらえる肩になるような仕事をしましょう、が結論です。

小越先生：いいメッセージだと思う。

ゼン先生：最後に「今の状況では先輩達は肩の上に立たせてくられないぞ！」と言つてしましました。

小越先生：ははは、言つてしまつたか。しかし、君らしくて、オレは好きだよ。

【今回のまとめ】

- 2025年2月はあっという間に逃げていきました。第40回 JSPENで教育講演をしました。
- 横浜観光に力を入れてしまいました。それにしても、横浜はすごい。あんな場所にロープウェイを作るかなあ。ミーハーとしては、乗らざるをえません。昼間乗つたら、夜も乗りたいと思うのが当然でしょう。でも、片道1000円は高いかも、わずか5分ですから。
- JSPENは経口栄養中心になっていました。日本全体の「栄養=食」の流れからすると仕方ないかもしれません。展示会場がそれを如実に表現していたと思います。
- 教育講演では、静脈栄養を開発したダドリック先生の思いを伝えたかったのですが、伝わったでしょうか。現在は、誰でも簡単にTPNをとりあえず実施できるようになっていますが、TPN開発の本当の意義を理解して欲しい。
- アンケート調査では、「医師の臨床栄養に関する知識レベルが低い」と3分の2の方が回答しました。やっぱり、医師の臨床栄養教育が必要です。どうすればいいのでしょうか？